

ご挨拶

けやきコミュニティ協議会

代表 島森 和子

けやきコミュニティ協議会が、この度、開館 20 周年を迎えることができ、喜びを感じると共に皆さまに厚く御礼申し上げます。

今日のけやきコミュニティ協議会（以下“けやき”）があるのは、コミセン開館以前から（けやきコミュニティ協議会自体が開館の数年前に発足）ご苦労された先輩の方々、運営委員・協力委員の皆様の努力の賜物であり、かつ地域の皆さまのご協力に支えられているものであります。

私が“けやき”の活動に関わったのは開館前の準備会からで、20 数年の月日が経っておりますが、いつも楽しく活動に参加してまいりました。今、私は図らずも代表の任についており、開館 20 周年の祝いの行事に携わる立場にありますが、大任を果たすべく身の引き締まる思いです。

20 年の間に様々な活動を通してたくさんの出会いがありました。“けやき”に参加して、私の感じるどころ次の三つのことが“けやき”らしさであり、誇れることと感じてまいりました。それは人の輪を大切に、よく話し合い、皆で運営することです。人の輪は、人への声かけに始まり、地域の人を知り合い、まちで挨拶する人が増えるここちよさ、信頼する仲間ができる喜び、その繋がりから協力して何かをやれる達成感、満足感を得られていきます。それは「けやきコミセンのありかた」等の勉強会、各イベント、さらに「まちづくり局」として様々なチームが生まれ、地域の皆さまとご一緒に活動し発展してまいりました。

またよく話し合うことにより、時間がかかっても、すぐに結論を求めず、多数の意見を聞き、お互いに理解し合うプロセスを常に大切にしております。

皆で運営することは、代表委員に任期を設けて替わり合い、運営委員は毎年交代して係を受け持ち、それによってコミセンを自分で担っている責任感と誇りを持つと共にコミセン全体を知ることができます。

今、支援事業として「子どもがつくるまちむさしのミニタウン」を支援、開館 20 周年記念事業の一つとして他団体に呼びかけ昨年「大野田地域の防災を考える会」を作り、自主防災組織の立ち上げをめざすなど、地域の他団体とネットワークをひろげつつあります。

武蔵野市コミュニティ構想である、自主三原則（自主参加・自主運営・自主企画）を基に、これからも“けやき”らしさを生かしながらさらなるコミセンの充実、発展をめざしてまいります。そしてコミュニティ活動を通じて自分たちの手でまちづくりをしていくという夢をもって、たくさんの皆さまが楽しく活動されることを願っています。

祝 辞

武蔵野市長

邑上守正

けやきに自由存す

けやきコミュニティセンター創立 20 周年、誠におめでとうございます。

「山林に自由存す」。扶桑通り公園の木立の向こうに、けやきコミセンのレンガ色の外観を見かけるたびに、独歩の詩のこの一節を思い出します。

「偉い人をつくらない」、「きまりをできるだけつくらない」、「よく話し合う」。この三つがけやきコミセンの基本的な方針だと伺いました。このことを教えていただいたとき、私は「自由」という言葉の意味を、改めて考えさせられました。どのようなものであれ、人の集まりが生まれると、私たちはその集まりの代表として、「偉い人」をつくったり、「きまりごと」を定めようとしてしまいがちです。しかし、集まったメンバーがいつの間にか、知らず知らずに「偉い人」や「きまり」に依存してはいないでしょうか。そして、お互いに話し合うことがおろそかになることはないでしょうか。

地域におけるきずな＝コミュニティづくりを考えると、自分たちの言葉で考え、じっくり話し合っていくことが、遠回りのようで実は一番の近道だったということにたびたび気づかされます。一方、一人ひとりが自由に振舞うことは、同時に自分たちの発言と行動に責任を持つということも意味します。

けやきコミセンでは、運営委員全員が必ず何か一つ以上の役割を担っているということもお聞きしました。きずなづくり、まちづくりをそこに住む市民が自分のこととして受け止め、自由に、楽しみながら、そして相応の責任も自覚しながら進めていく。けやきコミセンにはこの雰囲気があふれています。

まさに『けやきに自由存す！』です。20周年を迎えたけやきコミセンが、自由に創意にあふれたコミュニティづくりを、これからどのように取り組んでいかれるのか、大いに期待しています。

そして、けやきコミュニティ協議会の皆様のますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

けやきの20年をみつめて

立教大学教授 けやき学舎メンバー

江上 渉



1990年10月1日・・・これは、まだ1歳にもならない“けやき”に私が出会った日です。この時に、今でも忘れることのできない衝撃を受けました。それは、案内されたコミュニティールームの雰囲気であり、センター建設までの歴史のお話しでした。それから19年、たくさんの“けやき”のみなさんとおつきあいをいただき、たくさんの驚きと感動をいただけてきました。

開館からほどない頃に“けやき”のマンネリ化を懸念していたことも、おどろきでした。館の管理がうまく軌道に乗ってきていることを喜ぶだけではなく、もう次の戦略が考えられていたわけです。そして実現したのが、開館から3年目の“おもしろ発見会議”でした。次から次へとおもしろい企画が溢れんばかりに満ちていた1年間でした。サンマもおそばもコーヒーも、みんな美味しかったけれど、野外ペインティングの巨大な絵ができあがったときの感動は、いまも昨日のことのよう思い出します。

5年目には『けやき並木に続く道』の編集作業がありました。企画、取材、原稿の整理など、ずいぶんと夜遅くまで作業をしたものです。さまざまな議論があり紆余曲折がありましたが、最初の1束が印刷屋さんから納品されたときのよろこびはひとしおでした。周年の記念誌といえ、10年目の『まちをつくる』では、運営委員のみなさんをはじめとして、多くの方に“けやき”への思いを語っていただきました。おひとりおひとりの語りの中に、熱くも冷静な“けやき”への思いが込められていました。

その後も、ときどき“けやきの曲がり角”といわれるのを聞いてきました。しかし、そのつど、初心をかえりみながら、つぎの一步を踏みだしてきたように思います。いつもそこにあったのは、話しをすることだったのではないのでしょうか。イベントで多くの人との出会いを演出することができたのも、“曲がり角”を乗り越えて新しい一步を踏みだすことができたのも、結局のところは“話しをすること”ができたからではないか・・・私は“けやき”の20年をそんな風に見ています。

いまこの時代にあってというより、いまだからこそ、何よりも大切なことは、いろいろな人と出会い、話しのできる場所が地域にあるということだと思っています。もう少し具体的にいえば、自分とは違う人生経験をもつ人、自分とは違う価値観をもつ人と出会って、その人の話を聞き自分のことも話すことができるコミュニケーションの場所です。“けやき”がこれからも末永く、こういう場所であって欲しいと願っています。